

韓国民家における部屋の呼称の地方差について (Ⅲ)

—主寝室の呼称としてのクンパンの使用地域の検討を中心として—

佐々木 史 郎

序

韓国の文化地理学研究における先駆者の一人、李泳澤（1965）は、間取り形式の特徴に着目して朝鮮半島の民家を「閔北型」、「閔西型」、「中部型」、「南部型」の4類型に大別した。その際、中部型民家および南部型民家の特徴の一つとして、厨房に隣接する部屋をそれぞれ「アンパン」（안방:内側・奥の部屋の意）、「クンパン」（큰방:大きい部屋の意）とよぶことを挙げている。この位置にある部屋は、ともに主婦の居室・主寝室として用いられるが、日常的に家族が集う団らんの場ともなる。この部屋をさすこれら2種の呼称の使用地域が中部地方と南部地方とに分かれることを指摘したのは、管見によれば、この李の研究が最初である。

その後、何人かの研究者が韓国の民家型分類と地域区分に取り組んだ結果、李の区分案にもいくつか修正が加えられるようになったが、家屋用語の地方差の検証はほとんど進んでいない。そこで筆者はまず、主寝室の呼称としてのアンパン、クンパンの使用地域の偏りの実態を把握することにした。これまでに、既存文献の所収図版から部屋名称を抽出・整理するとともに、日本留学中の韓国人留学生を対象に予察的なアンケート調査を実施した（佐々木、2007）。次いでソウルと釜山の大学で第二次アンケート調査を実施し、現代の住居で用いられている部屋呼称の地方差の把握を試みた（佐々木、2012）。その結果、アンパンの使用地域とクンパンの使用地域が南北に分かれる傾向にあることは、確認できたが、クンパンの使用地域は必ずしも南部型民家の分布域には対応していない様子がうかがわれた。本稿はそうした知見をうけ、対象を拡大して実施した第三次アンケート調査の結果報告である。

I. 今次調査の概要

1. 対象およびサンプル数

第一次アンケート調査では、得られた回答数が50に満たず、全国的な傾向を見るには不十分だったが、続く第二次アンケート調査では、祥明大ソウルキャンパスと釜山大を合わせて約170の回答が得られた。アンパンとクンパンの比率は全体ではほぼ2:1であったが、嶺南地方¹では逆にクンパンがアンパンを上回り、ソウル・京畿道を中心とした中部地方とは顕著な差を示した。しかし、両大学が立地する中部・嶺南両地方以外のデータは少数にとどまり、全国的な傾向を把握するには、なお不十分さが残った。この調査を実施した2大学は、それぞれ韓国最大の都市である首都ソウルと第二の都市釜山（プサン）にキャンパスをおく有力大学であることから、回答者には親元を離れて就学する遠隔地出身の学生も多いことが予想されたため、学生自身の現住地ではなく、家族の住む実家の所在地を問うことにしたが、全体としては、回答の地域的な偏りが大きかった。とくに、従来嶺南と並ぶクンパン呼称の卓越地と目されていた南西部の湖南地方²のデータは不十分で、中部・嶺南に準じた密度で検討するには至らなかった。

そこで今次調査では、実施先をソウル・釜山以外の都市に所在する大学に求めることとし、各地方の大学の地理学科に所属する大韓地理学会ないし韓国歴史地理学会の関係者にメールで趣旨説明と協力依頼を行って、アンケート用紙を送付した。その結果、最終的に湖南地方の全南大（光州広域市）と全北大（全羅北道全州市）、湖西地方³の忠北大（忠清北道清州市）と西原大（同）、嶺南地方の慶尚大（慶尚南道晋州市）に加え、仁川広域市の京仁教育大（仁川広域市）と江原道春川市の春川教育大（江原道春川市）の計7大学から協力が得られ、各大学の学生から計696枚が回収

された。反面、大田広域市・忠清南道および大邱広域市・慶尚北道所在の大学からの回収はなかった。また、済州道は本土とは異なった独特の家屋用語を用いることが知られており⁴、今回の調査対象からは除外した。

2. 設問内容

アンケートの設問項目は、回答のしやすさや設問趣旨の誤認回避などを目的に、前回調査のものを微修正したが、基本的に同様の枠組みを踏襲している。すなわち、自宅において家族生活の中心となる部屋を何と呼んでいるかを問うのが主眼であり、「アンパン」・「クンバン」・「アレッパン」(아랫방: 下部屋の意)・「その他」の4つからの選択式とした。ここで「アレッパン」を加えたのは、李(1965)が関西型民家⁵の特徴として、厨房に隣接する部屋にこの語を用いているためである。実際、韓国の大学関係者に今次調査の打診を行った際に、「実家では昔アレッパンとよんでいた」との情報提供があった。また、筆者も1970年代に京畿道・忠清北道の境界部をなす車嶺山脈一帯でこの呼称を複数採録している(佐々木, 1984)。

また、それ以外の部屋について、「チャグンバン」(작은방: 小さい部屋の意)、「コンノンバン」(건넌방: 板間をはさんで向かいの部屋、越えていく部屋の意)、「アレッパン아랫방」, 「ウッパン웃방」(上部屋の意)、「サランバン」(사랑방: 舎廊房、主人の書斎兼接客室)を例示し、呼称使用の有無を選択式で問うた。さらに今回、厨房・台所に対して、一般的な「プオク」(부엌)の代わりに地方的な用語とされる「チョンジ」(정지)という呼称を用いることがあるかどうかとも問うことにした。

各回答の帰属地域の特定にあたり、前回同様、家族の住む実家の所在地は道およびその下位区画である市ないし郡までの記入を求めるとともに、そこでのおよその居住年数も10年区切りで尋ねることにした。また、韓国では一般に居住地変更が活発であり、現在の自宅所在地が必ずしも使用呼称の地方的背景を反映していない可能性が考えられることから、父母それぞれの出身地の記入欄も設けた。さらに、付随的情報として、実家の住居形態も「在来式単独住宅」、「現代式単独住宅」、「アパート・マンション」、「その他」の4種から

の選択で回答を求めた。

3. 集計の概略

今回実施した第三次アンケート調査では、計614枚の回答が寄せられた。そのうち、「その他」の回答が21例、留学生で実家が外国にあり、この調査に適合しないなどの無効回答が2例あった。これらを除いた591例の内訳をみると、アンパンが472例、クンバンが125例であった。うち6例は両方を併用するとしており、祖父母はクンバン、両親はアンパンとよぶとの注記を付した回答も1例あった。主寝室を「アレッパン」とよぶとの回答はなかった。

これらに第二次調査時の祥明大・釜山大の分を合算すると、アンパンは578例、クンバンは177例で、双方の併用は8例となる。忠清南道以北のサンプルが増えたためか、全体としてアンパンの比率が高まっているのが、目につく。

なお、「その他」の回答についてみると、「オンマバン」(엄마방: 母の部屋)、「ブモニムバン」(부모님방: 父母の部屋)とともに、「コシル」(거실)という記入が目立った。これは漢字では「居室」となるが、現代住居において日本語の居間ないしリビングに相当する部屋をさす。通常はフローリング床であり、ソファなどを置き、家族の共用空間、団らんの部屋として使用する。設問では「自宅で最も主となる部屋」という表現をとったため、「家族が集う部屋」ととらえて、この団らんの場であるリビングとしての「コシル」を挙げたものと推測される。この場合、主寝室にはアンパンなりクンバンなりの語彙が維持されている可能性があるが、確認できないため、分析対象からは除外した。

それ以外の部屋に対する呼称について、使用ありとした回答をみると、「チャグンバン」が最多の355例に上り、次いで「コンノンバン」が70、「ウッパン」が58、「アレッパン」が31、「サランバン」が13の順となった。また、厨房「プオク」に代わる「チョンジ」呼称の使用は6例あり、うち1例は「チョンゲ」(정계)との訂正が書き込まれていた。

自宅の建物様式では、有効回答573例のうち、アパート・マンションが419例で4分の3近くを占め、次いで現代式単独住宅が2割強で、この両

者を合わせると、全体の94%に上る⁶。アンパン回答群458例、クンバン回答群115例に分けて集計しても、この上位2者の合計はともに94%を示した⁷。したがって、この両呼称の使い分けに、住居様式の別との対応は認められない。

また、現在地に自宅を定めた時期をみると、有効回答572例のうち、2000年代以降が過半の55%を占める⁸。1990年代も加えると、約94%に上り、回答者の相当数がこれまでに1回は転居を経験している様子がうかがわれる。アンパン回答群では2000年代以降が56%、1990年代以降では94%となり、クンバン回答群でも2000年代以降で51%、1990年代を加えると、やはり94%で、両群の間に大きな差はみられない⁹。

Ⅱ．アンパン呼称の全国的な優越傾向

今回の調査結果に顕著に表れているのは、アンパン呼称の全国的な優越傾向である。忠清北道以北の大学でのアンケート回収数が多かったこともあるが、相対的にクンバンの比率が高い値を示す湖南・嶺南の各道においても、アンパンがクンバンを上回っている。表1は回答を寄せた学生の自宅所在地別に集計したものであるが、第二次調査でクンバンがアンパンを上回った釜山広域市や慶尚南道でも、アンパンが過半を占めた。これを表2、表3のように父親の出身地別や母親の出身地別で集計しなおしても、ほぼ同様の傾向となっている。

表1. 回答者の自宅所在地別にみた主寝室呼称の分布

	自宅所在地	全	A	K	K / A
	ソウル特別市 仁川広域市 京畿道	294	256	38	0.15
	江原道	50	47	3	0.06
湖 西 地 方	忠清北道	47	47	0	0.00
	大田広域市 世宗特別自治市 忠清南道	32	28	4	0.14
	大邱広域市 慶尚北道	27	15	12	0.80
嶺 南 地 方	釜山広域市 蔚山広域市 慶尚南道	117	66	51	0.77
	全羅北道	78	50	28	0.56
	光州広域市 全羅南道	102	61	41	0.67
	済州特別自治道	5	5	0	0.00
	(道名不詳)	3	3	0	0.00
計		755 (100%)	578 (76.6%)	177 (23.4%)	0.31

* A：アンパン、 K：クンバン

表2. 回答者の父親の出身地別にみた主寝室の呼称

	父親出身地	全	A	K	K / A
	ソウル特別市 仁川広域市 京畿道	125	117	8	0.07
	江原道	58	52	6	0.12
湖 西 地 方	忠清北道	49	47	2	0.04
	大田広域市 世宗特別自治市 忠清南道	56	52	4	0.08
	大邱広域市 慶尚北道	58	39	19	0.49
嶺 南 地 方	釜山広域市 蔚山広域市 慶尚南道	122	68	54	0.79
	全羅北道	101	68	33	0.49
	光州広域市 全羅南道	146	98	48	0.49
	済州特別自治道	6	6	0	0.00
	(道名不詳)	34	31	3	0.10
計		755 (100%)	578 (76.6%)	177 (23.4%)	0.31

* A：アンパン、 K：クンバン

表3. 回答者の母親の出身地別にみた主寝室の呼称

	母親出身地	全	A	K	K / A
	ソウル特別市 仁川広域市 京畿道	155	142	13	0.09
	江原道	50	44	6	0.14
湖 西 地 方	忠清北道	48	43	5	0.12
	大田広域市 世宗特別自治市 忠清南道	51	46	5	0.11
	大邱広域市 慶尚北道	67	48	19	0.40
嶺 南 地 方	釜山広域市 蔚山広域市 慶尚南道	106	58	48	0.83
	全羅北道	82	57	25	0.44
	光州広域市 全羅南道	137	85	52	0.61
	済州特別自治道	5	5	0	0.00
	(道名不詳)	54	50	4	0.08
計		755 (100%)	578 (76.6%)	177 (23.4%)	0.31

* A：アンパン、 K：クンバン

もちろん、今回の調査においても、サンプル数はなお不十分さを否めないし、回答者が大学生に限られているということの制約も考慮しておく必要がある。大学進学のための諸条件はやはり都市部が有利であり、回答者の中にそうした環境で進学した学生が多いとすれば、核家族化しがちな都市生活をおくる中で、両親の世代ともども伝統的な民俗語彙よりは標準語的な語彙にふれる機会が多くなるのは、当然の趨勢ともいえよう。

表4. 各道級行政区における主寝室呼称の回答市郡数

	道級行政区	市・郡総数	自宅所在地別集計		父親出身地別集計		母親出身地別集計	
			A	K	A	K	A	K
	ソウル・仁川・京畿道	33	26	14	18	3	21	6
	江原道	18	15	3	15	3	13	3
湖 西 地 方	忠清北道	11	4	0	10	1	9	4
	大田・世宗・忠清南道	17	12	2	15	2	15	2
嶺 南 地 方	大邱・慶尚北道	24	8	6	14	9	16	9
	釜山・蔚山・慶尚南道	20	9	11	15	18	13	15
湖 南 地 方	全羅北道	14	9	8	14	9	13	8
	光州・全羅南道	23	11	10	20	14	21	17
	済州特別自治道	2	2	0	2	0	2	0
	計	162	96	54	123	59	123	64
	対全国比 (%)	100	59.3	33.3	75.9	36.4	75.9	39.5

* A：アンパン、K：ケンパン

* ソウル特別市、世宗特別自治市、仁川・釜山・大邱・大田・光州・蔚山の各広域市はそれぞれ1市として集計。

* 同一市郡に帰属するサンプル数の多寡は問わない。

表5. アンパン呼称における回答頻度別市郡数の分布

	1市郡当たり回答数 () 内は市郡総数	自宅所在地別集計				父親出身地別集計				母親出身地別集計			
		3～	2	1	計	3～	2	1	計	3～	2	1	計
	ソウル・仁川・京畿道 (33)	16	4	6	26	6	3	9	18	7	7	7	21
	江原道 (18)	7	3	5	15	5	6	4	15	3	5	5	13
湖 西 地 方	忠清北道 (11)	3	0	1	4	6	2	2	10	6	2	1	9
	大田・世宗・忠清南道 (17)	3	2	7	12	7	6	2	15	6	3	6	15
嶺 南 地 方	大邱・慶尚北道 (24)	2	0	6	8	4	5	5	14	3	9	4	16
	釜山・蔚山・慶尚南道 (20)	5	2	2	9	4	5	6	15	6	2	5	13
湖 南 地 方	全羅北道 (14)	4	1	4	9	10	1	3	14	8	3	2	13
	光州・全羅南道 (23)	3	3	5	11	10	8	2	20	12	3	6	21
	済州特別自治道 (2)	0	1	1	2	1	0	1	2	0	1	1	2
	全 国 (計 162)	43	16	37	96	53	36	34	123	51	35	37	123

* ソウル特別市、世宗特別自治市、仁川・釜山・大邱・大田・光州・蔚山の各広域市はそれぞれ1市として集計。

次に、この2つの呼称について、市郡名まで記入された回答を抽出し、その帰属する市郡の数を地方別に集計すると、表4のようになる。ここでは、道と同格に位置づけられるソウル特別市と釜山など6つの広域市、それに2012年に発足した世宗特別自治市はそれぞれ一つの市として集計し、釜山広域市機張郡や大邱広域市達城郡のように広域市に含まれる郡は算定していない。また、これらの特別市・特別自治市・広域市はそれぞれ分離前の所属道と合わせて集計している¹⁰。

アンパン呼称の回答があった市郡数をみると、自宅所在地別では93カ所と、全国162の市・郡の中で60%弱にとどまったものの、父親の出身地別と母親の出身地別の集計では、ともに75%を超えている。また、すべての道において市郡総数の過半を占めており、全国的な広がりを示している。これをさらに3例以上の回答があった市・郡の数にしばってみても、自宅所在地別、父親出身地別、母親出身地別の集計がそれぞれ43カ所、53カ所、51カ所であり、その分布は南部一

表6. クンバン呼称における回答頻度別市郡数の分布

	1市郡当たり回答数 () 内は市郡総数	自宅所在地別集計				父親出身地別集計				母親出身地別集計			
		3～	2	1	計	3～	2	1	計	3～	2	1	計
	ソウル・仁川・京畿道 (33)	1	1	12	14	1	1	1	3	1	0	5	6
	江原道 (18)	0	0	3	3	2	1	1	4	0	2	1	3
湖 西 地 方	忠清北道 (11)	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	4	4
	大田・世宗・忠清南道 (17)	0	1	1	2	0	1	1	2	0	0	2	2
嶺 南 地 方	大邱・慶尚北道 (24)	1	1	4	6	1	0	8	9	1	2	6	9
	釜山・蔚山・慶尚南道 (20)	2	5	4	11	4	6	8	18	4	5	6	15
湖 南 地 方	全羅北道 (14)	4	1	3	8	4	1	4	9	4	3	1	8
	光州・全羅南道 (23)	2	3	5	10	8	3	3	14	5	3	9	17
	済州特別自治道 (2)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	全 国 (計 162)	10	12	32	54	20	13	27	60	15	15	34	64

* ソウル特別市、世宗特別自治市、仁川・釜山・大邱・大田・光州・蔚山の各広域市はそれぞれ1市として集計。

帯まで広く覆っている(表5)。これで見ると、アンパン呼称の使用地域は、次章でみるクンバン呼称に比べ、はるかに偏りが少ない。こうしたことから、少なくとも父母の世代以降、すでにアンパンが地方的な呼称というより、全国的に用いられる標準語的な呼称となっている様子が再確認できる。

Ⅲ. クンバン呼称の使用地域の偏在

1. 全体傾向

全国的な広がりを出すアンパンに対し、クンバン呼称の回答があった市郡数は自宅所在地別で54カ所、父親出身地別で59カ所、母親出身地別で64カ所と、いずれも全国162カ所に対し、40%に満たない数であった。また、道別の市郡総数の過半に達しているところは限定されており、その所在は南部への偏りが顕著である。表6をみると、3例以上の回答があった市・郡は、人口規模が大きいソウルを除けば、いずれも嶺南・湖南両地方に限られており、他はごく散発的な分布にとどまる。

ここでクンバンという呼称について留意しておくべき点は、家庭によっては、実際に部屋の大小を意識して用いている場合もありうるということである。伝統建築による庶民住宅では、主寝室をクンバンとよぶ場合でも、一般に他の部屋との間に面積上、特段の差はなく、時には主寝室の面積

が副寝室を下回ることもあった¹¹。この場合は、部屋の大きさとは別の背景をもった用語とみなしうる。

それに対して、回答者の家庭の大多数が居住する現代住居では、アパート・マンション等の集合住宅と単独住宅の別を問わず、主寝室を他の寝室よりも広くとるのが全国共通の傾向である(佐々木, 1994)。また、寝室の使い方が就寝時に床に布団を敷く形から常時ベッドを置いておく形に変わり、家族が集う場が主婦の居室からリビングや食堂に移る傾向もみられる。そうした場合、主寝室をその利用主体によって「母の部屋」、「父母の部屋」などとよぶ以外に、文字通り「大きい部屋」という意味でクンバンとよぶ状況は、南部地方だけでなく、全国的に十分起こりうるであろう。今回、主寝室以外の部屋の呼称として「チャグンバン」(小さい部屋)が多数上がっていたのも、そのことと関係している可能性がある。このチャグンバンという呼称はクンバン回答群だけでなく、アンパン回答群でも多数寄せられており¹²、部屋の呼び方を決めるにあたって、部屋の大小に即した表現をとる場合が少なくないことがうかがわれる。したがって、今次調査で回答のあったクンバン呼称を、すべて方言的な性格のものとして捉えるのは適当でない。

しかし、そうしたことを考慮しても、クンバン呼称が南部地方と結びついた地方的語彙としての

表7. クンバン呼称の使用家庭における父母出身地の組み合わせ

		母 親 の 出 身 地										
		ソウル特別市 仁川広域市 京畿道	江原道	湖西地方		嶺南地方		湖南地方		不詳	計	
				忠清北道	世宗特別自治市 忠清南道	大田広域市	慶尚北道	大邱広域市 慶尚南道	釜山広域市 蔚山広域市			全羅北道
父 親 の 出 身 地	ソウル特別市 仁川広域市 京畿道		4					1	1		1	8
	江原道			2			1			2	1	6
	湖 西 地 方	忠清北道		1	1							2
		大田広域市 世宗特別自治市 忠清南道				1	1		2			4
		嶺 南 地 方	大邱広域市 慶尚北道	2		2	1	11	2		1	
	釜山広域市 蔚山広域市 慶尚南道		2		1	1	3	43	1	3		54
	湖 南 地 方		全羅北道	3	1	1		1		19	8	
		光州広域市 全羅南道	2	2		2		1	3	37	1	48
		不詳						1	1			1
	計		13	6	5	5	19	48	25	52	4	177

面を今なお強く残していることは否めない。クンバン呼称の回答が集中するのは、ソウル大都市圏を除けば、やはり嶺南・湖南両地方を中心とする南部一帯であり、その内訳をみても、広域市や道庁所在都市以外でクンバンの回答が複数あった市・郡はやはり南部一帯に偏在している。父母の出身地別でみれば、その傾向がさらに顕著である。また、表7でみるように、クンバン回答者には南部出身者同士の両親をもつ家庭が多い。いずれの集計でもソウル・仁川・京畿道でクンバンの回答がある程度を示すのは、この首都圏に全国各地からの人口集積が早くから進行してきたことの反映であろう。

なお、アンパン・クンバン以外の部屋呼称として、わずか6例ながら「チョンジ」（チョンゲを含む）の回答があったが、うち5例はクンバンの回答者からであり、いずれも湖南・嶺南出身者を親にもつ家庭であった。これは、南部地方の民家研究文献で数多く記載されている呼称である。ただし、江原道以北でも一般的な呼称とされており、必ずしもクンバンとのみ結びつくものではないようである。

2. クンバン呼称の使用市郡の分布

次に、自宅所在地・父親の出身地・母親の出身地の3通りの集計でクンバンの回答があった市・郡の位置を地図に示すと、図1～3のようになる。自宅所在地別集計による図1で京畿道に散発的に現れているクンバン回答の市郡は、父母の出身地別に集計した図2、図3ではかなり減少し、代わって慶尚北道南半部と全羅南・北道に多く現れるようになる。

今次調査で、忠清北道・忠清南道のデータが大幅に拡充されたにもかかわらず、これら湖西地方でのクンバンの回答数はごく僅少にとどまっており、全羅北道以南の湖南地方との間には、一定の不連続がみられる。湖西 - 湖南の境界は従来、南部型間取りの分布北限と目される線よりも、かなり南方に位置する。母親の出身地別集計では、忠清北道の北東部で1郡、南部で3郡に散発的にクンバン回答がある。うち南部の3郡は、慶尚北道南部との連続性もうかがわれるが、いずれも1郡あたり1例のみの回答であり、それらをもって、ただちに当該地域での代表性の認定に結びつけるのは避けるべきであろう。

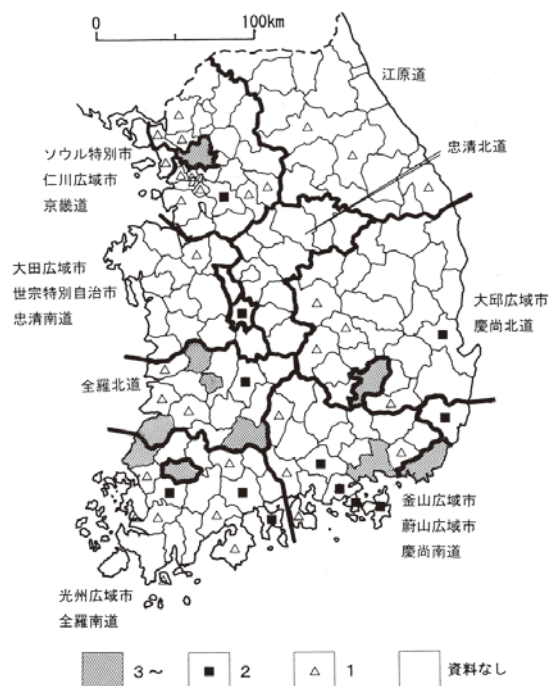


図1. クンバン呼称の1市郡当たり回答数（回答者の自宅所在地別）

※済州特別自治道は除く。

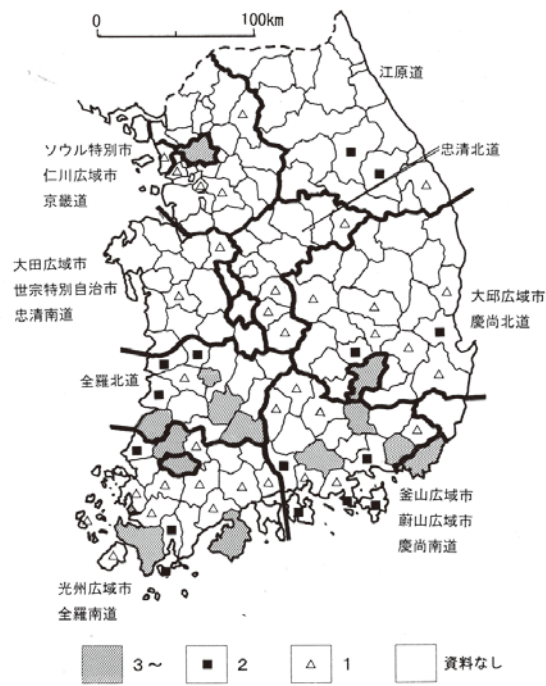


図3. クンバン呼称の1市郡当たり回答数（回答者の母親出身地別）

※済州特別自治道は除く。

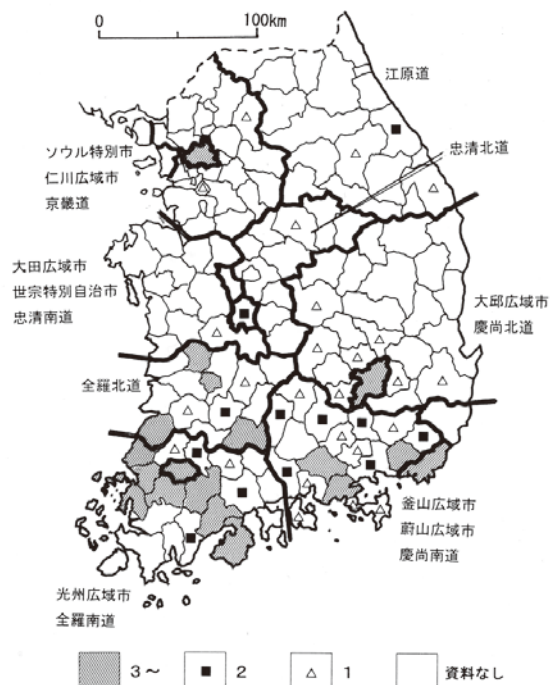


図2. クンバン呼称の1市郡当たり回答数（回答者の父親出身地別）

※済州特別自治道は除く。

ただし、これら忠清北道出身の母親につながるクンバン回答4例について、父親の出身地をみると、嶺南地方の大邱、慶尚北道慶州、慶尚南道昌原、湖南地方の全羅北道高敞となっており、いずれも南部地方との結びつきを示唆している。また、自宅所在地をみても、4例中、3例が嶺南（大邱、蔚山・慶尚南道昌原）である。

一方、大邱・慶尚北道では、クンバン呼称の回答が南半部に偏り、北半部にはほとんどみられないのが注目される。このことについては、大邱広域市・慶尚北道所在の大学からの回収がなく、この地域に結びつくデータが不十分だったことも考慮しておく必要がある。

しかし、当該地域出身の父親につながるクンバン回答19例のうち、市郡名不詳の1例を除く18例はいずれも南側の市郡に集中している。さらに、それらについて母親の出身地をみると、嶺南11（大邱4、釜山1、慶尚南道南海1、慶尚北道亀尾2、同慶州・軍威・尚州各1）、湖南1（全羅南道和順）となる¹³。一方、母親の出身地別でも、大邱・慶尚北道出身の母親につながるクンバン回答15例は南側の市郡に偏っている。また、それらのうち父親の出身地が南部地方のものが12例

(嶺南の大邱5、慶尚北道軍威・高霊・尚州・鬱陵各1、釜山2、湖南の全羅北道益山1)に及んでいる¹⁴。こうしたことから、実際にクンバン呼称の北限が慶尚北道北部には及んでいない可能性がある。

韓国の民家研究者の間では、朝鮮半島北東部に多い複列型間取りから南部一帯に分布する単列一字型間取りへの漸移帯が慶尚北道を南北に二分するあたりにくると想定する見方が有力であり(佐々木、2003)、今後、その対応関係の解明も課題となる。

南西部の湖南地方は、厨房－主寝室－板間－副寝室を横一列に並べる単列直家型の間取りの分布域として知られるが、それとは別に、全羅南道の沿岸島嶼地域を中心に、厨房の両側にオンドル部屋を配置し、末端に板間をおく独特の間取りの存在が知られるようになった。クンバン呼称の回答があった市郡は、この双方の間取りの分布域にまたがっている。

結び

今回の調査でデータが大きく拡充されたことにより、主寝室の呼称としての「アンバン」の普遍化と、南部地方と結びつく地方的語彙としての「クンバン」の維持という基本構図が再確認される一方、クンバン呼称の分布北限に関しては、ある程度具体的な想定が導かれるにいたった。また、そうした分布状況は、主寝室の呼称を特定の民家型にむすびつけて捉えた李泳澤(1965)の見方に修正を迫るものであり、今後、より詳細な検証が必要である。

ただし、これまで行ってきた大学生対象のアンケート調査では、農村部を視野に入れた民俗語彙の収集・分析において、明らかに限界がある。今後、年配者に対象を広げつつ、これらの呼称の分布域の検証精度を高めるべく、新たな方法を講じていきたい。

謝辞

今次調査の実施にあたり、全南大の李禎祿教授、全北大の李康源教授、忠北大の姜昌淑教授、西原大の沈正輔教授、慶尚大の奇槿度教授、京仁教育大の全種漢教授、春川教育大の朴承圭教授に多大

のご協力を賜った。末筆ながら、記して心より謝意を表したい。

¹ 韓国南東部の旧慶尚道地方の別称。現在は慶尚北道、慶尚南道のほか、大邱(テグ)・蔚山(ウルサン)・釜山(プサン)の3広域市が含まれる。

² 旧全羅道地方の別称。現在は全羅北道・全羅南道・光州広域市に分かれる。

³ 旧忠清道地方の別称。現在は忠清北道・忠清南道・大田広域市・世宗特別自治市に分かれる。

⁴ 床暖房を施した部屋を「パン」(房)に代えて「クドゥル」、家屋中央部の板間は「マル」や「テチョン」(大庁)ではなく、「サンバン」とよぶ、など。主寝室は「クンクドゥル」(大オンドル部屋)、副次的な寝室は「チャグンクドゥル」(小オンドル部屋)となり、本土の「クンバン」「チャグンバン」に近いが、建物をさす場合、主屋は「アンクリ」で「内棟」という意味になる。

⁵ 朝鮮半島北西部の平安南北道一帯に分布するとされた単列直家型で中央部の板間(大庁)を欠いた間取りの民家。

⁶ 全体の内訳はアパート・マンション419例(73.1%)、現代式単独住宅120例(20.9%)、在来式単独住宅12例(2.1%)、その他22例(3.9%)。

⁷ アンバン回答群の内訳はアパート・マンション340例(74.2%)、現代式単独住宅91例(19.9%)、その他19(4.1%)、在来式現代住宅8(1.8%)の順。一方、クンバン回答群では、アパート・マンション79例(68.7%)、現代式単独住宅29例(25.2%)、在来式単独住宅4例(3.5%)、その他3例(2.6%)。

⁸ 全体では1990年代が224例(39.2%)、2000年代が211例(36.9%)、2010年代の104例(18.2%)の順で、その合計は544例。1980年代は13例(2.3%)、1970年代以前は20例(3.5%)。

⁹ アンバン回答群の内訳は2010年代91例(20.0%)、2000年代165例(36.2%)、1990年代174例(38.2%)、1980年代9例(1.9%)、1970年代以前17例(3.7%)。

一方、クンバン回答群では2010年代13例(11.2%)、2000年代46例(40.0%)、1990年代50例(43.1%)、1980年代4例(3.4%)、1970年代以前3例(2.6%)。

¹⁰ これら各市の旧所屬道と分離年は以下の通り。ソウル(京畿道、1946)、釜山(慶尚南道、1963)、仁川(京畿道、1981)、大邱(慶尚北道、1981)、光州(全羅南道、1986)、大田(忠清南道、1989)、蔚山(慶尚南道、1997)、世宗(忠清南道、2012)。なお、世宗特別自治市の発足時に忠清北道清原郡の一部も編入されたが、忠清南道からの編入部分が市域の大半を占めており、ここでは大田広域市・忠清南道と合算して集計した。

¹¹ 1980年代になされた韓国各地の民家調査の報告書から主寝室(a)と副寝室(b)の面積を抽出し、両者の比(b/a)を計算すると、ほぼ0.9～1.1の幅におさまる(佐々木1994、56頁)。この値が1を超える場合は副寝室の方が大きいことを意味する。ただ、全羅南道の海岸島嶼地域で0.59という値が出たが、この場合、厨房・寝室・板間の3者の組み合わせを基本として、厨房脇に補助的な性格の小規模な寝室(モバン모방:隅部屋の意)が付加されるという特徴に由来するものと思われる。これは、厨房にオンドルの寝室2という組み合わせ

せを基本として、そこに板間をはじめとする他の要素が付加されていく他地域の民家とは異なった様相をみせている。

¹² 「チャゲンバン」の呼称ありとした回答は、アンパン回答群 466 例のうち 268 例（58%）、クンバン回答群 107 例のうち 87 例（81%）に上る。

¹³ 他はソウル 2、湖西地方南部 3（忠清北道沃川・永同、忠清南道青陽）。

¹⁴ 他はソウル・大田・江原道江陵が各 1。

参考文献

- 佐々木史郎（1994）「韓国の現代住居における平面構成の変化傾向」『宇都宮大学教養部研究報告』28 号 1 部、49-60 頁。
- 佐々木史郎（1984）「韓国車嶺山脈中部地域の民家」『地学雑誌』93 巻 4 号、12-30 頁。
- 佐々木史郎（2003）「朝鮮半島の民家型分類をめぐる諸研究と課題」『「もの」から見た朝鮮民俗文化』（朝倉敏夫編、新幹社）25-40 頁。
- 佐々木史郎（2007）「韓国民家における部屋の呼称の地方差について（Ⅰ）—主寝室の呼称としてのアンパンとクンバンの分布を中心として—」『宇都宮大学国際学部研究論集』23 号、1-8 頁。
- 佐々木史郎（2012）「韓国民家における部屋の呼称の地方差について（Ⅱ）—主寝室の呼称にみる中部地方と嶺南地方の対比を中心として—」『宇都宮大学国際学部研究論集』34 号、17-23 頁。
- 李泳澤（1965）「平面構造上으로 본 韓國의 家屋分布」『地理』（韓国地理教育会）1 巻 1 号、1-6 頁。

한국민가에 있어서 방 호칭의 지역성 (Ⅲ)

- 주된 침실의 호칭 “큰방”의 사용지역 재고 -

Regional Differences of Room Names in Korean Houses (Ⅲ)

Reconsideration of the distribution of “Kheun-bang” as a name for a main bedroom

사사키 시로오
(SASAKI Shiro)

(요약)

한국민가에 있어서 가장 중심적인 되는 방에 대해서는 [안방]이라는 호칭이 표준적으로 널리 사용되어 왔다. 한편 남부지방을 중심으로 [큰방]이라는 호칭도 흔히 사용되는 것으로 알려져 있어, 이영택(1965)은 이들 두 가지 호칭을 각각 [중부형 민가]와 [남부형 민가]의 특징으로 지적하였다. 필자는 그 지적내용을 검증하는 목적으로 과거 두 번에 걸쳐 예비적인 조사를 시도해 보았으나, 자료가 미흡한 지역이 많아 전국적인 분포를 파악하지 못 하였었다. 본 연구에서는 특히 [큰방]의 사용지역에 대한 보다 구체적인 검증을 위해 한국의 7개 지방대학에 의뢰하여 설문지조사를 실시하였다.

이 번 조사를 통해, [안방]이라는 호칭이 전국적으로 보편화되는 반면, [큰방]이 계속해서 남부지방의 지역적인 어휘로 유지되어 있다는 기본구도가 거듭 확인되었다. 그와 더불어 [큰방]이 분포되는 북방한계에 대해 어느 정도 구체적으로 추정할 수 있는 단계에 이르렀다. 즉, 충청남도과 전라북도의 경계부분에 하나의 불연속이 있는 것으로 보아진다. 이 것이 사실이라면 [큰방]의 분포지역은 남부형민가가 분포되는 북방한계보다도 더 남쪽으로 위치하게 될 것이다.

한편, 영남지방에서는 경상북도를 남북으로 양분하는 중간부분을 경계로 그 북쪽에는 [큰방]이 나타나지 않았다. 기왕 연구 중에는 이 경계부분에 관북-관동지방의 겹집형민가가 영동, 호남지방 등 남부지방의 홑집형민가으로 옮겨가는 점이지대가 있는 것으로 주장하는 견해가 있다. 또한, 호남지방에서는 남부형민가의 분포지역뿐만 아니라, 남서해 도서지역의 이른바 중앙부엌형 민가의 분포지역에서도 [큰방]이라는 호칭이 흔히 사용되는 것이 확인되었다.

앞으로 [큰방] 호칭의 사용지역 특징과 더불어 각종 민가유형과의 대응관계를 보다 구체적으로 검증하기 위해 다른 방법으로 조사를 시도해 보고자 한다.

(2015年11月2日受理)